

2025 年 2 月 1 日

制作者：岩田晴太郎

所属：立命館大学総合心理学部

タイトル：矢印の傾き錯視

解説：

この画像の灰色の横線はすべて平行である。しかし、矢印の列が傾いて見える。この画像の錯視は灰色の横線を挟み込むように配列されている図形の配色パターンによっておこると考えられる。灰色の線の上の段が「白色, 薄い灰色, 黒色, 濃い灰色」で、下の段が「薄い灰色, 白色, 濃い灰色, 黒色」のときはそれらの間の灰色の線の右側が上がって見える。しかし、灰色の線の上の段が「薄い灰色, 白色, 濃い灰色, 黒色」で、下の段が「白色, 薄い灰色, 黒色, 濃い灰色」のときはそれらの間の灰色の線の右側が下がって見える。配色は蛇の回転錯視(北岡, 2020)を参考にした。

白色と薄い灰色で構成される領域を「明領域」、黒色と濃い灰色で構成される領域を「暗領域」とする。すると、明領域と暗領域の中で錯視が生じており、明領域と暗領域の境界では錯視は生じないことがわかった。したがって、この画像は灰色の線よりも明るい色で構成された部分における錯視的傾きと、線より暗い色で構成された部分における錯視的傾きの両方を含んだものであることがわかる。このメカニズムは Kitaoka, Pinna and Brelstaff (2004)のカフェウォール錯視系統の基本原理由って起こっていると考えられる。

引用文献

北岡 明佳 (2020). 現代がわかる心理学 丸善出版

Kitaoka, A., Pinna, B., and Brelstaff, G. (2004). Contrast polarities determine the direction of Cafe Wall tilts. *Perception*, 33, 11-20.